

神明HD藤尾社長が語るコメ消費 「農業資材高騰、家計圧迫要因に」

2026/06/22 02:00 日本経済新聞電子版 1434文字

日本人の主食であるコメの生産が秋の収穫に向けて全国で進んでいる。「令和のコメ騒動」から2年近くがたち、一転して店頭にはコメが多く並ぶ。今後の市場動向について卸会社大手、神明ホールディングスの藤尾益雄社長に聞いた。

——足元のコメの消費動向をどのように見えていますか。

「騒動の際は店頭で5キロ入りが5000円前後まで高騰した。今は3500円前後に下がっているが、水準はずいぶんと高くなった。120～130円で並んでいたコンビニのおにぎりも200円を超えるようになった。あらゆるモノの価格が上がって、家計が大変ななかで、結果的に麺類やパン類へ消費のシフトが起きた」

「外食産業も相対的に安い米国などから輸入したコメを多く使うようになった。今もコメの消費量は落ちたままだ」

——中東情勢の混乱によって、農業資材の価格は上がっています。

「農家の7割が肥料や資材の高騰によって生産コストがあがるとみている。農家の負担はこれまで以上に重くなり、営農を続けることが難しくなっている。消費サイドからみても、農作物の価格を押し上げ、家計を圧迫する要因だ。状況をつぶさに注視しなくてはならない」

——今の市況はどうでしょう。

「卸会社が取引する川上の市場では相場の下落基調が続いている。政府備蓄米の放出や輸入米の増加などが影響して市場ではコメが余っている」

「国内のコメ卸会社の在庫は4月末時点で65万トンだった。これは例年の1.6倍の水準で、これまでみたことのないような次元に入っている」

「問題なのは、価格が高いときに仕入れたコメが在庫になっているということだ。相場が下げ局面のなかで、卸会社は赤字になってしまうのでスーパーへの出荷価格を大きく下げることはいできない」

「弊社も1俵（60キロ）あたり3万3000～3万4000円で仕入れたコメが2万3000円前後になり、評価損を計上した。これから多くの卸会社が苦境に立たされることになる。経営の体力がある卸会社でないと、かなり厳しいだろう」

——今年のコメの収穫予想は733万トンで、需要見通し（696万～711万トン）を上回ります。

「これまでのところ天気や気温は好条件が重なっている。これからどれだけ猛暑が厳しくなるのかはわからないが、現状だけみれば収穫量は良さそうだ。足元の在庫も多いため、新米が出てきたら一段と需給は緩んで、相場は暴落する可能性がある」

——どんな価格戦略を描いていますか。

「大切なのは失った需要を取り戻すこと。価格は下がったといっても、消費者から見るとまだ高い。今



今年の稲作はこれまでのところ天候に恵まれている（埼玉県加須市）



神明ホールディングスの藤尾益雄社長

後、店頭で5キロ3000円以下にせざるを得ないと考えている」

「『魚沼産コシヒカリ』など高級な銘柄米もあっていいが、ブレンド米などを使ってリーズナブルな価格で販売したい。令和のコメ騒動以降、店頭から消えてしまっている10キロ入りも6000円ぐらいで復活させたいと考えている」

「コンビニのおにぎりも、これまでのように120～130円で販売してもらえるように願っている。コメは主食だからこそ低価格で供給すべきだ」

「これから今年秋に収穫されるコメの取引が始まる。各地域の農協が提示する『概算金』（農家への仮渡し金）の動向がポイントになる。各地域から調達する我々としては仕入れ戦略がかなり難しいシーズンになる」

（聞き手は編集委員 筒井恒）

ふじお・みつお 曾祖父が創業した米穀卸会社（現神明HD）に1989年入社。2007年に現職。コメのほか外食や青果分野への事業拡大を推進。61歳

許諾番号NK003557 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.